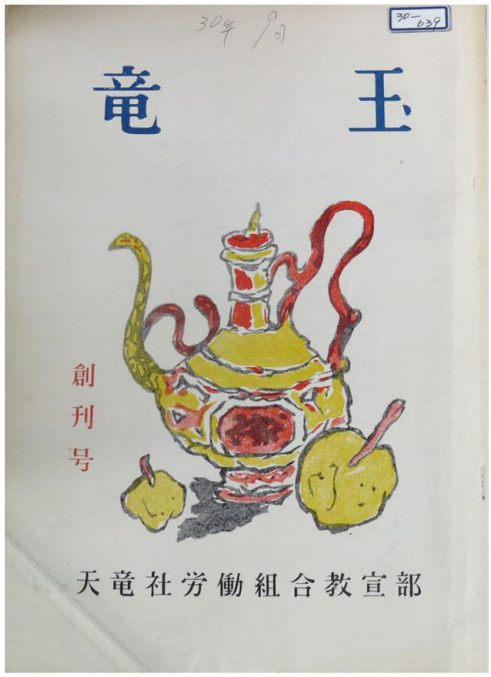
飯田市 歴研ニュース
News Letter No.108
The Iida City Institute of Historical Research
2020年10月1日 発行

飯田市歴史研究所
〒395-0803
長野県飯田市鼎下山538
TEL 0265-53-4670
FAX 0265-21-1173
E-mail iihr@city.iida.nagano.jp

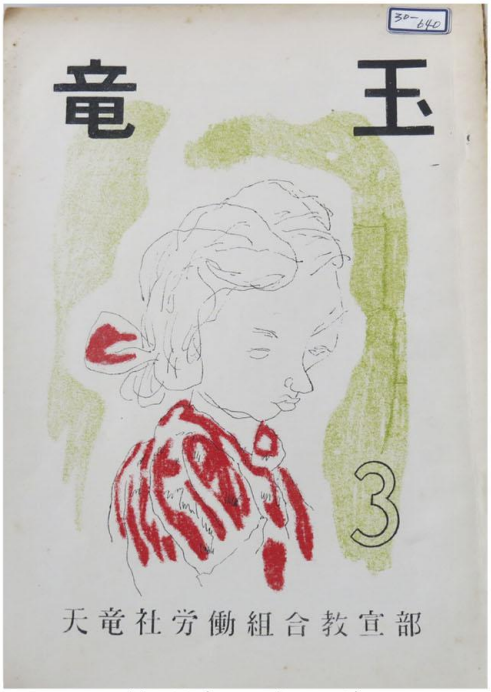
― 史料紹介 ― 天龍社労働組合雑誌「竜玉」

飯田・下伊那で戦前から戦後にかけて活動した天龍社は、日本屈指の組合製糸として有名です。天龍社では、労働組合運動も盛んにおこなわれており、その資料が『天龍社労働組合資料』として飯田市歴史研究所に所蔵されています。その中から、『竜玉』という雑誌を紹介したいと思います。この雑誌は、天龍社労働組合の機関誌として1955年に創刊されたもので、年に数回程度刊行されていたようです。歴史研究所には、1955年の創刊号から1965年に刊行されたものまでを所蔵しています。労働組合の機関誌といっても、ただ組合活動の様子やその主張を記録しているだけではありません。生活雑記のような形式をとり、日々の仕事や生活の中で感じた思いを素直に記述している文章が多いことが特徴的です。組合活動の記録や時事評論といった記事に加えて、日々の生活の中での思いをつづった「ひとりごと」や組合員による詩やエッセイも掲載されており、その内容は多岐に及びます。



創刊号（1955年 9月）

天龍社の工場で女工として勤務していた、10代～20代の若い女性たちの率直な思いが『竜玉』に掲載された文章からは伝わってきます。「どうしたって今年の正月にはお母さんに暖かいメリヤスの下着を買ってあげたい。それに自分だって、セーターの一枚ぐらい買いたいのに、現在の賃金では、そんな望みもかなえないのです。考えると情けなくなってしまいます。」「夕食が済んで、私生活に入った時『ああパンが食べたい』と思うことがあります。しかし、私の心はパンを食べたいという気持ちと、いやそんな金は私にはないんだという気持ちが心の中でくみついてあらそいます。」「私だって、年老いた両親に孝行がしたい。何かいい物を買って喜ばせてあげたいと思うのですが、自分でどうしても必要な品を買ってしまえば、お母さんを喜ばせてあげる物がかえなくなるのです。たまに百円位のものを買って行って、お土産をだすと、何ともいえないうれしそうな顔で「ありがとうよ。」と言い、あかぎれのあれた手を出して、大切そうに持っていきます。」厳しい仕事や賃金への不満、離れて暮らす家族への思いやささやかな未来への希望などが、まっすぐな文章でつづられており印象的です。



第3号（1956年 3月）

現在の歴史学では、戦後史も研究の対象として分析が進められています。その際には、そこで暮らした人々の生活や思いを、正確に理解していくことも大切な課題の一つになるでしょう。『竜玉』につづられている文章は、戦後の飯田・下伊那の人々の暮らしを理解する上で大切な資料の一つになっていくのではないかと考えています。

（研究員　太田仙一）

天龍社労働組合が刊行した機関誌『竜玉』。歴史研究所には、欠号もありますが、創刊号から16号までが所蔵されています。
※雑誌では「天竜社労働組合」とありますが、本文では「天龍社」と記しています。

飯田歴研賞２０２０

飯田市歴史研究所では、前年度に発表された飯田・下伊那の地域史研究に関する優れた作品を、歴研賞として表彰しています。2020年度は、以下の4つの作品が受賞されました。なお、今年度の飯田市地域史研究集会が中止になったため、受賞式は検討中です。

著作賞

片桐秀人（かたぎりひでと）氏　『自分史　この道を行けば』　（私家版、2019年9月）

【講評】

歴研の「自分史ゼミ」から生みだされた大変優れた作品である。心をゆさぶられた。

全4部構成をとっていて、そのどれもが、一人の人間の生きた記録、障がい福祉の実際の記録、地域社会の歴史の極めて重要な記録となっている。これほどの記録をまとめられたことに、心から敬意を表したい。

全体を通して、障害を持って生まれてきた子と共に家族が一つになって生活と人生を切り拓いてきた記録である。最後に記されている「障がい者福祉に生きる目的があって八十路を迎えられたことは幸せだったとおもっている。障がいの子を持って幸せであったと胸をはって言いたい」という文章に心をうたれる。

このような自分史をかかれた片桐秀人氏だけでなく、こうした作品を生みだした飯田市歴史研究所の「自分史ゼミ」にも拍手を送りたいと思う。

【受賞の言葉】

歴研賞受賞の栄を賜り、身に余る光栄に感謝申し上げます。予てより自分に繋がるルーツと歩んで来た過去を記録しておきたいと思い、写真、忘備録、資料綴等を保存して来ていましたが、どうしようかと思っていた折、貴研究所の「自分史ゼミ」に出席し、同期生の作品と、スタッフの粟谷さんの熱意に動かされ、少しずつ書き進み、何とか陽の芽を見ることが出来ました。講評で纏めて戴いた通り、貧農家に生れ、障害を負う子を授かり、自ら拓いて来た道程を近しい方々に著すことが出来ました。今は僅かな農地を耕し心静かな日を送っていますが、52歳になった我が子は残存する能力の範囲で、身動きが緩慢になった父母の生活援助をしてくれている昨今です。

著作賞

小島庸平（こじまようへい）氏　『大恐慌期における日本農村社会の再編成
－労働・金融・土地とセイフティネット』
（ナカニシヤ出版、2020年２月）

【講評】

本書の意義は以下の点にある。

1　地域史料を広く収集し、説得性をもった歴史叙述として構成した。
2　従来、「社会・経済的危機」と把握されてきた昭和恐慌以降の日本社会史に対し、生存のための社会的諸装置・諸関係の様相を論じ、「危機」に向かい合う人びとの行動を内在的に叙述した。
3　それゆえ、「貧困」「窮乏」といった〝ことば〟の社会的機能も視野に入り、同時に人びとの経験史に即して〝ことば〟の内実が豊富化されている。政策過程の分析に比重があるが、人々の社会認識を通じて問題を深める素材を提供したことは重要である。
4　金融・土木事業・就労機会と移民の問題など、従来、別々に検討されてきたテーマを、地域を設定することにより相互連関的に把握した。

こうした優れた方法的な視点をとることによって、「危機」のもとでの人々の行動を内在的に理解し、これを通じて当該期の「社会（再）編成」・国家のありかた、についての新しい歴史像を描くことができている。本書は基本的には経済史として読み込まれる仕事であるが、広く地域社会史としても読むことができる。

【受賞の言葉】

伊那谷の美しさに魅せられるようにして飯田へ本格的に通いはじめたのは、2009年のことでした。史料を読み込むほどに、目に映る山や田畑や道を見る目が変わり、穏やかな景観の中にも歴史の激しい動きが刻み込まれていることを知りました。地域史研究の醍醐味を、他ならぬ飯田・下伊那地域に教えていただきました。

そうした学恩だけに留まらず、この度は受賞の光栄にまで浴し、飯田に足を向けて寝られぬ思いを深くしています。振り返れば、飯田歴研の歴代のスタッフの皆様や、櫛原勇三・充子ご夫妻をはじめとする市民の皆様には、本当にお世話になり通しでした。この場をお借りして、改めて厚く御礼申し上げます。

論文賞

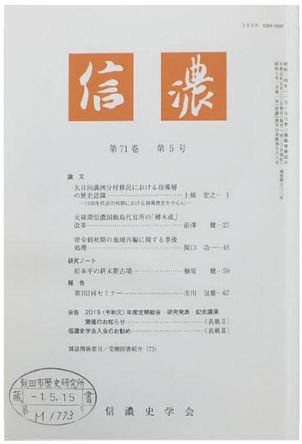
前澤健氏（まえざわたけし）

「元禄期信濃国飯島代官所の「榑木成（くれきなり）」改革」

（『信濃』第71巻第5号（通巻第832号）、2019年5月）

「一七世紀における榑木役の変質」

（『飯田市歴史研究所年報』第17号、2019年9月）



【講評】

多くの山村を抱える下伊那において、榑木をめぐる貢納体制は広域的な分業体制のあり方を強く規定していると考えられ、その解明は重要な課題である。しかしこの体制は、本途（ほんと）か小物成（こものなり）か、現物納か代金納か米納かなど、複雑な問題を抱えており、事実の確定は困難である。この難問に長年取り組んできたのが前澤氏である。今回受賞対象となった2本の論文において、氏は広範囲にわたる史料を地道に渉猟し、とくに年貢割付状の書式についてていねいな考察を行うことによって、三浦宏氏が提起した地域類型論を発展させつつ、延宝期から享保期にかけての貢租制度と運用の変化について見通しを得た。また、従来蓄積の浅かった榑木米に注目し、榑木の搬出における川長村の役割を論じながら、17世紀を通じた榑木役の変質過程について論じた。これらの業績は、今後下伊那の近世史研究を進めるうえでいずれも参照されるべきものであり、確実な貢献をしたということができる。

【受賞の言葉】

和合村の天和3年（1683）の免定にある「御年貢榑木を以可皆済者也」という文言を見た瞬間感じた違和感。そこから出発し、牛歩のごとく遅々とした歩みで研究を進めてきました。この度、2編の拙稿に対して、歴研賞・論文賞を賜り、ありがとうございました。

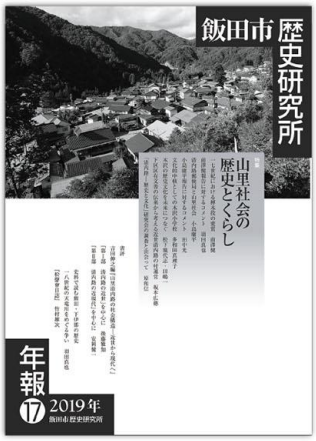
この2編は、それぞれ幕府領の「榑木成」、飯田藩の「榑木米」を対象としたものですが、未検討な部分も多々あります。榑木は、17世紀の伊那郡の支配の根幹であり、社会の様々な領域に影響を与えた存在でした。今回の受賞を励みに、今後も榑木からみた近世下伊那の姿を追って行きたいと考えています。

奨励賞

坂本広徳氏（さかもとひろのり）

「下区区有文書の伝来から考える近世清内路の村運営」

（『飯田市歴史研究所年報』第17号、2019年9月）



【講評】

この論文は、阿智村清内路に豊富に残された歴史資料の中で、その中心に位置する下区区有文書について、文書群としての形成と継承の過程を解明しようと試みたものである。まず初期の世襲名主・新蔵家の名主文書を核とし、18世紀前半における名主の交代、18世紀中期からの年番制への移行、18世紀半ば上清内路からも名主を取りたて、などの変容の中で、段階的に文書が増加し引き継がれてゆく過程を、安永年間、嘉永期、明治初期などの節目を見ながら復元的に考察する。そして、区有文書に含まれる下区部落文書の検討から、村と上・下二つの部落との相互関係を検討し、清内路固有の村運営の特質に迫る。また、村を構成する中老や若者組の位置、清内路に残される他の旧名主家文書との関連などを課題として抽出する。こうして本論文は、文書群の階層構造とその継承・伝来過程を精緻に追うことで、村運営の歴史を見る上での重要な論点を呈示した点に意義がある。

【受賞の言葉】

このたびは歴研賞をいただき、ありがとうございます。

本稿は、古文書を大事に引継ぎ、我々の調査を受け入れてくださる清内路の皆様、およびこれまで調査をしてきた研究会のメンバーのおかげで、まとめることができました。また、報告・投稿の機会をいただいた飯田市歴史研究所にもお世話になりました。ありがとうございました。

私は、内容が豊富な清内路の史料群にふれるうちに、史料がなぜ、どのように引継がれてきたのかという点に興味を抱くようになり、本稿につながりました。本稿で抽出された課題も含め、清内路に残された各史料群についての性格や、清内路全体での位置づけも検討しつつ、調査を続けていきたいと思います。

※リレーエッセイはお休みさせていただきます。

飯田アカデミア2020第93講座

私流 歴史の本のつくり方 ―編集者として考えてきたこと―

11月14日(土)

第1講 13：30～15：00
原典を編むということ ―読める史料集とは

第2講 15：20～16：50
歴史を読み取り伝える ―岩波新書の編集作法

講　師　**井上一夫**（いのうえ かずお）さん（元岩波書店取締役）

会　場　**飯田市役所 C棟3階会議室**

資料代　**500円　※高校生以下無料**
※１講義のみでもご参加いただけます。

講師より

わたしはあるときから、学術教養出版社がめざすべきは二つに収斂されるのではないかと思うようになりました。ひとつは「残す言葉を選び抜く」であり、いまひとつは「届くかたちを編み出す」。これは濃淡の差こそあれ、すべての出版物が備えるべき二つの要素ではないかと。

たとえ人気が無くても（あるいは人気が無いからこそ）、出すべきものがあり、そのとき可能な限りわかりやすく、がんばれば読めるように工夫する努力がなされなければならない。また、いかに引く手あまたであっても（それだけ求める人が多いわけですが）、しかるべきメッセージが込められていなければならない。その緊張感が本の質を決めるのではないか。ひそかにそう思っていました。

わたしが岩波書店に入ったのは1973年。すでに刊行中だった「日本思想大系」に配属され、以後10年にわたって携わります（校正3年編集7年）。学術教養とは何かを考えるにあたって、このときの経験がいかに貴重だったか、あとで何度も思い返すことになりました。これは「残す言葉」を編む作業であり、そのとき考えた工夫は「日本近代思想大系」につながります。

そして岩波新書では、主として日本史関係書目を企画編集し、「届くかたち」の追求が大きな課題になりました。ちなみにこのとき、それまでの新書イメージとは違う性格のものもつくっていて（永六輔『大往生』、阿久悠『書下ろし歌謡曲』、山藤章二『似顔絵』、鈴木敏夫『仕事道楽』等々）、言葉を届かせるうえでのさまざまなヒントを得ています。

本は一冊一冊が個性的なものであり、本来、一般化できるものではありません。したがってこの講義では、大きく網をかけたうえで、私なりに感じてきたことを具体例に即してお話ししていきたいと思っています。何かしらヒントになるものがあれば幸甚。

☆飯田アカデミアは、歴史学における第一線の研究者に、最新の研究成果をわかりやすく紹介していただくものです。

定員40名程度とさせていただきます。事前申込みが必要になりますので、ご希望の方は11月13日（金）までにお電話でお申込みください。（0265-53-4670）※日曜日・月曜日・祝日は休所

新型コロナウイルス感染防止のため、会場でのオンライン講座とさせていただく場合があります。

また、当日、お名前・ご連絡先をご記入いただきます。予めご了承ください。

歴研ゼミ＆ワークショップ 10月・11月の予定

受講生募集!!

スタッフとともに歴史を学んでみませんか。

会　場：歴史研究所 研修室

※満洲移民研究ゼミと近世史ゼミは鼎公民館にて開催します。

定例研究会

１９５０年代における天龍社の経営

開催日：**11月21日(土)**
時　間：**14：00～16：00**
会　場：**鼎公民館**
報告者：**太田仙一**（研究員）

※聴講ご希望の方は歴史研究所までお電話ください（0265-53-4670）

満洲移民研究ゼミ
担当：本島和人（調査研究員）
齊藤俊江（調査研究員）
第108回 10月3日／第109回 11月7日
（第1土曜日）10：00～11：40
※11月7日は飯田市公民館

地域史ゼミ
担当：太田仙一（研究員）
10月9日／11月13日
（第2金曜日）18：30～20：30

近現代史ゼミ
担当：田中雅孝（特任研究員）
10月10日・24日／11月28日
（第2・第4土曜日）10：00～11：40

建築史ゼミ
担当：福村任生（研究員）
10月16日／11月20日
（第3金曜日）19：00～21：00

近世史ゼミ
担当：羽田真也（研究員）
10月14日・28日／11月11日・25日
（第2・第4水曜日）18：30～20：30

思想史ワークショップ
市民の皆さんが自主的に学び合う場
10月7日・21日／11月4日・18日
（第1・第3水曜日）19：00～20：40

ゼミ・ワークショップの詳細・お申込みについては、歴史研究所までお問い合わせください。 TEL：0265 - 53 - 4670

各種講座、アカデミア、ゼミについては、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、発熱・咳などの症状のある方やマスクを着用されない方の受講はご遠慮ください。また、今後の感染状況により、中止または延期をする場合がありますのであらかじめご了承ください。

開所時間：午前9時～午後5時　休所日：日曜日・月曜日・祝日・12月29日～1月3日